



談話室

編集にたいする一つの苦言

本誌も本年1月以来面目を一新して着々充実して行くことは、編集部各位の御努力の賜と深く感謝する次第であるが、ここに苦言の一つ呈させて頂きたい。

およそ本誌の如き印刷物に誤植を絶無にすることは現在の印刷事情ではほとんど望み得ないことであつてここに筆者があえて申述べたいことは、校正の不十分さや単なる誤植の問題ではなく、特に英文において、編集又は校正に当られる方に、もう少しの注意を願いたいことと、著者の正しい用字をわざわざ改悪せられた点についてである。

筆者は本誌4月号に一文を発表させて頂いたのであるが、その印刷された英文の要旨を見ると、原稿には Tentative Specifications for the Design of Steel Highway Bridges, 又は Am. Ass. of State Highway Officials 等とタイプライタでハッキリと印書しておいたものが、各語の初めの大文字がすべて一律に小文字になつていた。これは単なる誤植ではなく、編集に当られた方が指示せられたものと考えざるを得ない。云うまでもなく固有名詞以外の普通の用詞は文中ではすべて小文字にするという原則に依られたものと考えられる。なるほど前記の design, highway, bridge, official 等それ自身はすべて普通名詞であるが、これらが集合した前記の一連のものは一つの固有名詞であつて、United States, Secretary of State, Congress of Industrial Organization (C.I.O.) 等と同様に、of 等以外は小文字で書き出すのが原則である。

およそ雑誌等の編集に際して著者の原稿に多少の加除訂正をすることは編集者に許さるべきことではあるが、以上の例のように、それが善意に基づくものであるにしても、拙いながらも苦心して正しく書いたものを勝手に改悪せられることは、著者としてまことに残念なことである。

若しこのように氣を付けて頂くならば、以上のよう

なことよりも、行の終りでハイフンを使つての語の分割の仕方に留意して頂きたい。筆者の英文要旨には語の分割が3ヶ所あつたが、3ヶ所ともすべて間違つていた。念のためにその他の論文の英文要旨と資料の外国文献の所を見ると、一つとして正しく分割されたものはなく全く出タラメであつた。これは一寸字引でも見れば直ちにわかることである。なお、これは甚だ失礼なことではあるが、同じく4月号に登載せられた内山実氏の論説の英文要旨の中に“property... are”又は“next comes problems...”のように主語と動詞との数が一致していない所があり、筆者の原稿中の大文字を小文字に直されるほどに氣を付けて頂けるならば、以上のような文法上の明らかな誤りこそ著者に注意して頂きたかつた。

また最近は何の説明文にはすべて英訳を付けることになり、編集部の方で英訳して下さるのは誠に有難いが、その中には、たとえ誤訳でないにしても何の意味かわからぬものが可成り多いし、また珍訳もある。もし図に英文を付けるのが原則ならば、それは著者に任すべきであり、またそのことを寄稿注意として一般に周知方をはかる必要がある。

最後に注意したいことは、本誌では数値に算用数字を使用するのが慣習となつているが、これが往々にして行き過ぎになることである。今では「十(充)分に」を「10分に」としたり、1つ、2つ、1般に、1, 2の、2, 3の、3 鉸拱橋・等のような馬鹿げたことが無くなつたのは喜ばしい。「第一に」も「先ず最初に」の意味ならば「第1に」としてはおかしい。それにしても4月号の筆者の論説で筆者の勤務先を原稿には「第二工学部、生産技術研究所」と書いておいたのが「第2工学部生産技術研究所」となつていた。コソマが無くなつたのは誤植と思われるが、第2工学部は生産技術とは別個の一つの固有名詞であつて、これを勝手に第2工学部とされることは、人名の二郎を2郎とするに等しい。この意味で4月号47頁に「東大1工、東大2工」とあるのも困る。同じく39頁の右欄に「国民の1人1人が」とあるのもおかしい。また45頁に「2億3千万呎³」等があるが、これはむしろ230 000 000呎³と書く方がよくはないか。同頁に「4億6千m³」とあるのは「4億6千万m³」の誤りではなからうか。もしそうだとすると460 000 000m³とすれば、こんな問題はすぐ発見できるはずである。この様に算用数字を使用されるにかかわらず、47頁の左欄の上方に「一日六十車」とあるのは首尾一貫しない。

以上、折角の編集部の方々の御努力に対して甚だ失礼に当るようなことを記したのは、本誌は他の市販誌

とちがつて少くとも權威あるべき学会の機関誌でありまた外国へも贈られるものである以上は、できるだけ立派なものになることを念願するからであつて、よろしく御寛容を願いたい。(福田武雄)

(編集部より) お叱りを受け衷心恐縮にたえません。今後出来るだけ御期待に沿うよう努めます。御指摘された中で内山氏の英文は著者がかゝれたものではありません。この点内山氏に対しても衷心御わびいたします。

質疑応答

(問) 鉄筋コンクリート標準示方書中鉄筋コンクリート第17章一般構造細目の106條に於て「ハリの鉄筋鉛直純間隔 e は(2段の場合)鉄筋直径の1倍又は2cm以上」と規定されていますが、ハリの有効高さを増すため2段を $e=0$ としてくつつけたら如何? さもなくば粗骨材の最大寸法の何倍か以上が、至当と考えますが、上の如きは如何なる根拠にもとづくものかお答え下さい。(会津若松市日吉8A生)

(答) 2段に鉄筋を配置する時に上下に適当な間隔を必要とするのは鉄筋に所要の付着強度を与えるために必要であります。このことは鉄筋とコンクリートが一体として働く上に是非必要なことでもあります。

又、鉄筋の水平間隔が粗骨材の最大寸法によつて規定されているのは、この間を粗骨材が容易に通過し得るためであります。鉛直間隔は、この間を粗骨材が通過する必要はなく、その間に十分モルタルが行きわたり、鉄筋をつみ、所要の付着強度を出すことが出来ればよいからです。(編集部)

★アメリカ通信★

(種谷 実君第2信)

5月末までに東部方面特にニューヨーク、ワシントン、シカゴで各種の基本的事項の調査をして、米國第一の土木建設業者たるモリソン・クヌードセン会社(グラントクーリーダムの施工者)の案内で、6月1日シカゴ発行程6,000哩に達する工事視察の自動車大旅行の途に上つた。この視察の主な工事はセントルイスでパナマ運河をしのぐチェインズ・オブ・ロックスの長さ1,200 ftの開門工事、アーカンソウ州のバルショールズ・ダム工事、ガリソン・ダム工事、ボイセン及びコルテス・ダム工事(ワイオミング州)、ハングリーホース・ダム工事(モンタナ州カナダ国境に12哩)等である。モリソン会社のジョンソン氏と共に元氣に旅

行中で昨日はガリソン・ダム工事を見学したが土量1億 $3y^3$ に達する世界第一の土堰堤で25 y^3 を積載する底開式ダンプカー66台の土運搬の盛綱に接した。(目下建設中のGarrison Damは世界最大の土堰堤Bismarekの北77哩、Minotの南60哩の地点、Missouri河峡谷にあり延長2哩、河床からの高200ftに達するものである。)

2回に亘りアメリカ通信を寄せられた鹿島建設常務取締役種谷実氏は、4月以来3ヶ月にわたる視察を終えられ去る7月12日空路無事帰國されました。御多忙中にもかかわらず通信を載いた氏の御好意に対し、紙上より厚く御礼申し上げます。(編集部)

新刊紹介

全日本建設技術協会運営委員長 谷口三郎著

大陸の曲線 B6判 270頁
定 價 200円

全日本建設技術協会 刊

本会元会長谷口三郎氏が昭和18年大陸に渡られ、13年10月帰國されるまでの6年間、実地に見聞された中國の社会、國共の相剋、中共の動向、残留日本人の諸様相を、幾多の挿話を交えて、科学的觀察眼と流麗なる文章を以て描写した興味深い隨筆である。戦後のかの地の情勢を窺知する一資料として、又將來大陸と不可分の關係を生ずべき我技術者にとつて、参考となるべき点大なるものがあると思われる。

尙本会では会員各位の御便宜をはかるため本書の御取次をいたしますから、御希望の方は送料共240円送金下されば直ちに送本いたします。

建設請負工事費内訳明細書標準書式

全國建設業協会から「法律171号廃止に伴う見積内訳書の処置について」と題し、從來発註者又は業者によつてまちまちであつた見積方式、表現要領等を是正する目的で作製した標準書式集を送られ協力を求められた。法律171号「政府に対する不正手段による支拂請求の防止等に関する法律」の廃止とともに工事費が再び昔のドンブリ勘定にもどることは建設業の進展のため望ましいことではないと思うのでこういった書式の統一化への努力に対しては協力されるべきではないかと思う。詳細は表記の題名で東京都中央区西八丁堀2の16建設工業資料頒布会(振替東京18253)から発行されている小冊子(定價50円送料10円)を参照されたい。